



「多久から発信！SDGs③」

「心をつなぐ」

トンパー・トンパー・トントパー・トンパー
今年も、腰鼓の練習が始まりました。ちゃんと
できるか不安だった1年前とは違い、今では大き
く堂々と踊ることが出来ます。しかし最近、別の
不安がでてきました。それは「教える」ことです。

西溪校では、6年生が5年生に腰鼓を教えます。
昨年教わったように動きの説明をしますが、5年
生は初めてなので、上手に覚えられません。時間
だけが過ぎていき、このままではだめだと思っ
ど、なんだか言葉も強くなってしまいます。そん
な自分がいやで、でも、どうしようもなく悩ん
でいるときに、先生が話していた言葉が耳に入っ
てきました。

「音を揃える、動きを揃える、心を揃える」
伝統を受け継ぐとは、これまで伝えられてきた
形や習慣をつなぐだけではなく、心をつなぐこと
でもあると知りました。そのとき、今までの私は
腰鼓の動きばかりを言い、大切な心を伝えていな
いことに気付きました。西溪校の伝統として、地
域の誇りとして大切に受け継がれてきた腰鼓。そ
の思いを、もう一度しっかり話してみようと思ひ



4 質の高い教育を
みんなに

東原彦舎西溪校 6年1組
小侍 凜音

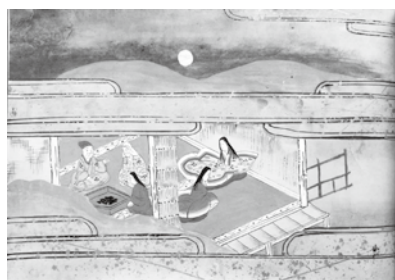
ます。最高の腰鼓が披露でき
るように、これからも頑張り
ます。

連
載

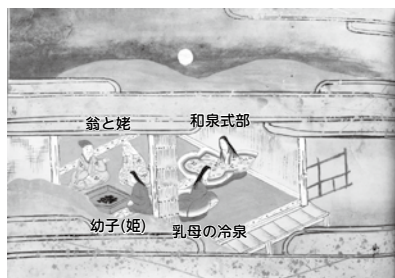
紫式部・和泉式部・小式部の物語 挿絵(8)

多久家資料『小しきふ(小式部)』を編集

『小式部(下)』挿絵8 和泉式部が子を探ねる話



老夫婦のもと幼子は歌を詠むまでに成長します。一方、
和泉式部は我が子を探ねたいと思い立ちます。



東寺の門で拾われた和泉式部の娘が十一歳になった頃、新たな物語
が始まります。

和泉式部は、子の行く末を尋ねてみようと思い立ち、夫に暇を請い、
大和の長谷寺に行き、乳母の冷泉人を連れて籠りました。何か御告
げがあったのか、尼の姿で長谷寺を出て、河内の奥山へ迷い込みました。
運よく山深き庵に辿り着くことができ、一夜の宿を借りたいと事情を話
すと、姥と翁も思いやり、柴の編戸を開き呼び入れました。

慣れぬ旅で、和泉式部は「やまざとはねられざりけり夜もすがら
まつく風におどろかされて」「山里では寝られなかつたことだ夜通し
松を吹く風で目を覚まされて」と詠みました。翁と姥はこれを聞き、
娘に返歌をするよう促します。すると、娘は「和歌を聞いて可笑しく
滑稽に思い、心の中で笑っていたのです」と答えました。式部は不思議
に思い「返歌を承りましょ」と言つと、幼い声で「やまざとにねぬ
とはいかにぬればこそまつくかぜもおどろかすらん」(山里では寝
られないとはどういふことですか山里でも寝られるからこそ松吹く風
もあなたの目を覚まさせるのでしょ」と答えました。和泉式部は
道理があると納得し、是非、その幼子に会いたいと申し出ます。見苦
しい着物ですからと老夫婦は断りますが、度々の要望に筆を連れて出
てきました。【挿絵8】

※原本の挿絵は色絵になっています。郷土資料館に写真を掲示しています
ので、お立ち寄りの際にご覧ください。

多久市郷土資料館長 藤井伸幸

市民文芸

短歌 《麦の芽短歌会 互選》

- 縫いぐるみ抱きし幼眠りしか
両手の指の徐徐にゆるみ来
川浪 信子
- けんかする楽しみもなく話しかく
夫の遺影に秋風むなし
梶原恵美子
- 紛争ひとつとめられずにいる施政者を
責める心とアキラメル心
尾形 節子
- 感動が心に刺さるありがとう
それを抜くには感謝しかない
野崎 隆幸
- 若き日の亡母が賜わりしすずり箱
杏葉の家紋未だ眩しき
浦野 嘉恵

俳句 《大石ひろ女選》

- 母の忌の供花に摘みたる野紺菊
本村 則子
- 秋の夜を読み更けてあるミステリー
富樫 明美
- 野も山も静寂深むる後の月
武富 律子
- 秋冷や下校の子等の急ぎ足
おおやはな
- 遺跡野の古りし逆茂木
そばの花
大石ひろ女

川柳 《多久川柳会 互選》

- ビール瓶蓋は美味しい音を立て
松下 修
- 出番待つ布団秋の陽浴びてよし
田代えみこ
- 投票はせず政治には愚痴を云う
西山 残月
- エンヤエンヤ祭り最高弾む声
高塚ちかこ
- 長寿日本人生なんと百年も
田中 正春